承認第 8 回中央委員会（2025 年 5 月 9 日）
承認第 8 回中央常任委員会（2025 年 5 月 9 日）

中央常任委員会 御中
中央委員会 御中

2025 年度立命館大学学友会学園祭運動方針

（起案：2025 年度立命館大学学友会学園祭実行委員会）

目次

1. はじめに
2. 学園祭運動の目的と意義
3. 情勢分析
4. 検討事項
5. 今年度の方向性
6. 戦略
7. 祭典戦略
8. パートの役割
9. 実行委員会体制
10. 財務・財政
11. 総括方法
12. おわりに

承認第 8 回中央委員会（2025 年 5 月 9 日）
承認第 8 回中央常任委員会（2025 年 5 月 9 日）

1. はじめに

1-1. 本方針の位置づけ

本方針は、2025 年度の学園祭運動を形成するにあたって、立命館大学学友会（以下、学友会）全体で特筆すべき情勢及び実態の認識を確認したうえで、共通の活動方針となる方向性を明らかにし、実現に向けた方策を提起することを目的としている。また、本方針を体現するにあたっては、立命館大学学友会運動規約に基づき『学園祭実行委員会』を立ち上げ、これを本方針の実現を担う組織として位置づける。

以下に、本方針の定義を示す。
「運営」：学園祭運動における企画と実行体制を管理・調整すること
「参画」：学園祭運動における企画に参与すること
「来場」：学園祭に訪れること
「参加」：「参画」または「来場」すること

1-2. 確認済文章

●2025 年度学園祭実行委員長任命のお願い

1-3. 2024 年度立命館大学学友会学園祭運動総括の取扱いについて

●2024 年度立命館大学学友会学園祭運動総括（抜粋）

1-1）本総括の位置づけ

本総括は、2024 年度の学園祭運動における単年度総括である。これまでの学園祭において培われてきた経験と知識を用いて行われた 2024 年度学園祭を、事前承認された 2024 年度立命館大学学友会学園祭運動方針(以下、方針)に基づいて総括することを通して、2025 年度以降の学園祭の発展と成功に寄与することを目的とするものである。あくまでも 2024 年度学園祭実行委員会の所見であり、2025 年度以降の学園祭運動において、総括内容を参照することを義務づけるものではない。

2. 学園祭運動の目的と意義

学友会会則第四条第一項より「会員の自主的諸活動により、学生生活全般の発展向上に努め、併せて学園の発展に寄与する」ことを学友会のあるべき姿として掲げている。

学友会は長きにわたり学園祭運動を展開し、学生文化における最大の発信の場として課外自主活動の成果の発表の機会を創出するなど、その時折の学生の学びと成長に寄与してきた。学園や学園祭を取り巻く情勢変化により求められる学園祭の姿も変化していくが、学園祭運動が持つ核心的意識は変化しない。

以上を踏まえて、2025 年度における学園祭運動における意義を短期的観点と長期的観点から定める。

2-1. 学園祭運動の短期（単年度）的意義

●可能性の拡大

2025 年度における学園祭運動の意義を「可能性の拡大」とする。以下の 2 点を達成することにより、この意義は達成されると考えられる。

1　多様なプラットフォームの創出

学園祭の一義的な意味は、場の創出にある。学園祭という形態そのものに意義が見いだされるのであって、その枠組みの中で、様々な背景をもち、また様々な状況にある学生が自らの可能性を拡大できることが可能な、多様なプラットフォームを創出することが求められるといえよう。

2　自己の確立

学生にとって節目となる機会を創出し、意識的に自己の振返りをすることで、学生は自らの成長を実感できる。また、さらなる成長に向けた目標を確認することで、自己を確立させられるものと考えられよう。

2-2. 学園祭運動の長期（継続）的意義

1　学園振興

立命館大学（以下、本学）全体を巻き込みながら学園祭運動を推進することで、学園祭運動は学園振興の一端を担う。学園祭を契機に学生のさらなる成長や可能性が拡大されることで学園振興につながっていくといえる。

2　地域貢献

前述のように、学園祭運動が 2024 年までの学友会活動の前提となっていることを踏まえると、2025 年度においても継続して学園祭運動を展開すべきであることは自明である。それにあたって地域の理解を得ることも従来と同様に必要不可欠であり、学園内のみならず、地域にも寄り添い、貢献できるような学園祭運動を展開することが求められる。地域に受け入れられ、かつ地域とのつながりが深まることにより、学園祭運動の可能性は広がるといえる。

3. 情勢分析

学園祭運動を形作っていくにあたって特筆すべきキャンパス情勢や参画者および来場者の実態を分析する。

3-1. キャンパス情勢

本学が有するキャンパスはいずれも地域一体型キャンパスであり、地域とは強い関係性を持つ。キャンパスごとに地域環境や距離等の諸事情の違いはあるものの、近隣住民との関係について整理する必要がある。これらを踏まえ、過年度の議論を参考にしつつ、2025 年度情勢を下記の通り判断する。

●衣笠キャンパス（以下、KIC）

KIC は、地域住民の生活との距離が非常に近く、お互いに影響を受けやすい環境といえる。日常生活におけるマナーの問題が特に地域住民の目に触れやすいことから、キャンパス内での音出しをはじめとする活動についても、制限せざるを得ない。ただ、今日に至るまでの協議の結果、地域住民との関係については改善の兆しもみられている。

また、2025 年は立命館大学創立 125 周年の記念の年であることから、KIC では立命館創始 155 年・学園創立 125 周年記念行事が推し進められている。

●びわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）

BKC の周辺地域は、集合住宅や工場等の住み分けが地域ごとになされている。そのため、本学が地域住民の生活空間と密接にかかわることは他の 2 キャンパスと比べて少ないが、スポーツ健康コモンズについては地域住民も利用しており、施設を通じた地域住民との融和が図られている。さらに、積極的に地域との交流を行っている団体も存在する。

一方で、KIC と同様に日常生活におけるマナーの問題が顕在化している。過去には地域住民との関係悪化が原因で東門が封鎖される等の問題も起きている。とはいえ、学友会も協力し、本学主催の BKC ウェルカムデーを実施するなど本学と地域住民との間で関係改善が図られている。

加えて、2025 年には「先端クロスバースイノベーションコモンズ（仮称）」と「グラスツール・イノベーションセンター（仮称）」が新設される予定である。この 2 つの施設は社会共生価値を創出する次世代研究施設として地域企業や自治体、市民と連携して新たな事業を生み出す施設となることから、さらに地域社会との連携が図られていくと考えられる。

●大阪いばらきキャンパス（以下、OIC）

OIC は、キャンパスに対する地域の関心が非常に高く、その関係性は他の 2 キャンパスとは比較にならないほど深い。OIC は行政との関わりも非常に深く、いばらきフューチャープラザや岩倉公園など、茨木市によって運営される施設がキャンパス内にある。そのため、近隣住民の姿もよく見受けられる。また、本学主催のイベントに対する地域の関心も深いため、多くの地域住民が訪れており、住民とキャンパスの関係性が密であるといえる。

一方で、2024 年度の学園祭では前日準備の際の音出しについて近隣住民より問い合わせがあった。OIC は近隣に住宅があるため、音出しを含め学園祭前日と当日に起こりうる問題に備え、対策を講じる必要がある。

加えて、2024 年度に映像学部と情報理工学部が OIC へ移転し、H 棟が新設されたことによって、最先端技術を駆使して学生の創造性を拡張する「TRY FIELD」の実現が目指されているとともに、社会共創が推進されている。

3-2. 参画者の情勢

◎学友会所属団体に所属している学生

学友会所属団体は、活動実績等により公認団体・同好会・任意団体・登録団体の 4 つに区分される。

●学芸総部本部所属団体

多くの団体が学園祭を活動発表の場と捉えている。学園祭への参画が年間行事の一つとして定着している団体も多いため、多くの団体の参画が期待できる。しかし、学園祭の時期に大会や公演会などの行事を控えている団体もあり、参画への機会を提供できていない可能性もある。

●学術本部所属団体（以下、学術団体）

学園祭を大きな発表の場と捉えていることが多い。従来、学園祭運動の企画形態が学術団体の研究成果発表に適さない形態であることが指摘されていたが、徐々にその問題も解消されている。展示を用いた発表を行うなどの工夫もみられるが、その企画形態によっては多少の参画数の変動が考えられる。

●体育会本部所属団体（以下、体育会団体）

体育会団体の一部によって企画が実施されるなどの盛り上がりを見せていた。しかし、体育会団体によっては学園祭の時期に公式戦等試合が集中しており、全体として参画はできてない。学生によっては来場しているものの、ごく僅かである。

●登録団体

登録団体においては、キャンパスごとに活動の規模、意識、実態に差が見られる。

KIC の登録団体、特に文化・表現系の団体は日常の活動では発表の機会が少ないこともあり、1 年間の活動の中で学園祭を核として位置付けている場合が多い。また、おおよそ活動の半期ごとの節目にあたる学園祭をモチベーション向上の手段として利用している団体も見受けられる。

BKC の登録団体は、施設利用権の面では KIC よりも恵まれている。しかし、そもそもの活動機会・資金が少ないため、満足に活動が出来ているとは言い難い。そのため、BKC に所属する団体にとっても、学園祭が相対的に大きな意味を持っている。

OIC の登録団体の数は、キャンパスの規模や他キャンパスに比べて開設されて日が浅いこともあり少ない。

最後に、このような発表に積極的な団体を除くと、現状は活動発表などではなくコミュニティとして模擬店などに参画する団体が大半なほか、全く参画しない団体も多いと言える。

◎学友会に所属しない団体所属の学生

近年、プロジェクト団体や学びのコミュニティ団体等、学友会管轄外の課外自主活動団体の活動も著しいものとなっている。この活動も学友会員として、また立命館大学生としての課外活動であり、これらの団体についても学友会所属団体と同様に学園祭において発信・発展の機会を得られるべきである。加えて、学友会に所属しない団体であっても、プロジェクト団体など大学に認められた団体や有志の団体による学園祭への参画も増えているが、現状の課題としてこれらの団体に我々が直接的な参画を訴える手段が乏しいことは、考慮に入れる必要がある。

◎課外自主活動団体に所属していない学生

課外自主活動団体に所属していない学生は、参画するきっかけになりうるものが不足しているといえる。そのため、課外自主活動団体に所属する学生と比較すると相対的に参画する意欲が乏しいと考えられる。

3-3. 来場者の情勢

●立命館大学生

本学学生の来場者としての側面は、自身の企画の合間を縫って他の企画を見ることや友人や知人の発表を見ること、学園祭の雰囲気を味わうこと等であると考えられる。

国際学生・留学生は、一部の講義や課外活動団体を除いては、日本人学生と関わる機会は少ないと考えられることから、日本人学生に比べると来場する目的に乏しい。

また、過去には障がいをもつ学生の来場も見受けられ、2025 年度においても一定数の来場が予想されるが、人によって必要な支援は異なる。

●立命館大学校友会

本学では卒業生を校友と呼んでいる。校友によって組織された立命館大学校友会は、母校の発展を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする団体である。卒業生であることから、立命館大学のイベントである学園祭に一定の注目をしていると考えられる。

●父母教育後援会

父母教育後援会は、立命館大学の教育方針に則り、父母との連絡を密に行い、教育事業を援助し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする団体である。日ごろから学生の成長を見守る父母であるため、学生のイベントは非常に注目しているものと考えられる。学園祭実施にあたっても情宣や企画への支援をいただいている。

●立命館大学受験生・高校生

受験生や高校生は、キャンパスや本学の学生を知る機会として学園祭に来場することが考えられる。また、本学は推薦入学者や提携校出身者も多く在学していることから、入学を控えた入学予定者にとって、学園祭への関心は高いと考えられる。

●地域住民

キャンパス情勢にあるように、キャンパスごとに地域環境との距離や事情に違いはあるものの、どのキャンパスにおいても地域と密接に関わっている。そのため、地域住民の本学への関心は高いと考えられる。

●学外者

本学は一定の知名度を誇るため、上記以外で学園祭に興味を持つ人は一定数いると考えられる。このような学外者に対しては、対象を限定した広報手段のみならず、不特定多数に対して拡散力を持つ媒体での情報宣伝が効果的となる。また、近年の来場者は多様化しており、妊婦や幼い子ども、お年寄り、日本語以外の言語を話す人々などの来場もみられる。よって、2025 年度においても多様な来場者が訪れることが見込まれる。

4. 検討事項

◎経年的課題

具体的な対策・手段については、今後学園祭実行委員会を中心として議論していく必要があるものの、過年度の運営体制などを振り返ってみると下記の課題が存在する。

●個人での高額な立て替え

例年、学園祭の準備にあたり高額な経費の立て替えを行うケースが発生している。これは現状の学友会費の性質に起因するものであるが、高額な立て替えを懸念し、企画規模が縮小されることや、立て替えによって個人の私生活に多大な影響をもたらすことを避ける必要がある。

●人的資源

例年、運営面において特に人手不足の問題が深刻である。年々改善されてはいるが、祭典当日に休憩の時間がなく、運営のみに徹している人員がいる現状がある。2024 年度の学園祭において、これが原因となって体調不良者が出てしまったため、早急に改善する必要がある。そのため、広く対外協力を募り、より多くの人員で運営できるよう取り組み、運営側の待遇改善に努める。

また、中央パートにおいては、主体的な参画は一部の団体にとどまっており、全学行事として動いているという自覚があるパートは少ないのが現状である。対外協力をはじめとして、積極的かつ主体的に運動に参画することを強く求める。

●中央パートとの連携

過年度における、学園祭実行委員会と中央事務局特別事業部をはじめとする中央パート各団体との連携については、情報共有などの面において、課題の残された点も少なくない。完成度の高い学園祭を創造するためには、過年度以上に団体間の連携を深めていくことが肝要である。各団体が集う会議や情報共有の仕組みを構築し、緊密な連携を促進する体制を整えることが求められる。

●安全対策

学友会が主催する企画やイベントにおいて 2016 年度、2017 年度と 2 年連続で火気に関する事故が発生した。2018 年度以降、火災等の重大な事故は発生していないものの、学園祭という行事の特性を考慮に入れると、事故の可能性は非常に高いといえよう。全企画において安全面に最大の配慮を行い、学園祭運動を形成していく必要がある。

●感染症対策

以前と比べると新型コロナウイルス感染症の感染拡大は収まったことから、本学においても 2019 年度以前の生活や活動が戻っているといえる。しかし、今後も新型コロナウイルス感染症のみならず、様々な感染症が流行する可能性が大いに考えられるため、情勢によってはコロナ禍で培った経験を活かした柔軟な判断をする必要があると考えられる。

5. 今年度の方向性

情勢を踏まえたうえで、学園祭運動の意義を体現できるように、学園祭運動の指針となるべき方向性を定め、参加を促す取り組みを展開していく。

1　学生文化の発信

学生が発信する文化の相互理解や、発信することによる自己表現、日常の成果の発信を行うことで、学生が普段得ることのできない刺激を得られるようにする。また、そのために準備等を通じて、自己の振り返りや目標を再確認する機会を設け、学生の自己確立と自己成長につなげていく。

2　非日常の創造

日常では得られない新たな発見をしたり、新たな感性を刺激したりすることで人の可能性は拡大され、成長が促される。したがって、参加者にとって学園祭が非日常なものとなるよう、空間的・感覚的なアプローチを行い、特別感のある空間を創造していく。

3　多様な参加者の受け入れ

3-3. 来場者の情勢にて触れたように、近年参加者の多様化が進んでいる。全学行事としての還元性の観点からも、多様な参加者を受け入れられる環境を整備する必要がある。そのため、多様な参加者が存在するという視点を踏まえた企画の実施・情宣・運営が必要である。

4　地域との調和

立命館大学が有するキャンパスはいずれも地域一体型キャンパスであり、地域との強い関係性を持つ。そのため、今後とも継続的に学園祭運動を行い、地域との関係を深めていくためには、地域からの理解が必要不可欠である。日常における諸問題の解決とより深い関係性構築を行っていくことによって、地域に寄り添った学園祭運動の推進、地域との調和につなげていく。

5　立命館大学学友会構成員の挑戦と成長

本学学友会では、学園祭を学生文化における最大の発信の場ととらえている。大学全体で学園祭運動形成を図ることによって、学友会構成員に成長と学びの機会を与え、社会で活躍できる力を備えた人材を育てていく。

特に運営者にとって、学園祭運動を通じた多様な実践経験は、主体性や実行力を養う機会となる。こうした個々の成長は、学園祭運動の質の向上と大学全体の活性化へとつながっていく。2025 年度は、成長と学びを促す環境の整備と 2024 年度以前の運営に関する課題の改善に取り組むことで、可能性の拡大の実現を図っていく。

6. 戦略

方向性を体現できるように学園祭運動を形成していくなかで、2025 年度における具体的な戦略を示し、この戦略に基づいて企画や計画を実施していく。以下、方向性を踏まえた 2025 年度の戦略を定める。

1　表現・発表の場の創出

学生文化を発信するためには、学園祭において文化を表現・発表する場を設け、その場に来場者が訪れる仕組みを作る必要がある。また、参画者は様々な分野の団体が対象であるため、表現方法や発信方法は多種多様である。そのため、団体特性やキャンパス特性を活かした多様な場を設ける。加えて、より多くの来場者に学生文化を発信できるよう、他企画への誘導を目的とした企画や取り組みを実施することが望ましい。

2　特別感の演出

来場者に非日常を感じてもらうためには、学園祭ならではの演出を行うことが重要である。

空間的なアプローチにおいては、それぞれのキャンパス特性を有効に活用し、日常とは異なる空間を創造することで、学園祭特有の雰囲気づくりに取り組む。

感覚的なアプローチにおいては、来場者に学園祭に対する期待感を抱かせるような企画や情宣の実施を図ることで、学園祭が特別視されるような仕組みづくりに挑戦する。

また、学園祭でしか体験できない目玉となるような企画は、来場者に非日常感を与えるとともに幅広い層の来場を促すことにつながるという観点から、実施することが望ましい。

3　効果的な広報

学園祭を盛り上げるうえで、多くの来場者を獲得することは重要である。また、学生文化の発信という点においても、多くの人に活動の成果を発信でき、かつ学生が多様な客観的評価を受け、刺激を得ることができる点で大きな意味を持つ。したがって、より多くの多様な来場者を獲得するためにキャンパスや参加者に合わせて広報を効果的に行う必要がある。

また、学園祭への関心が薄い層に対しても来場を促すことが望ましい。これらの層に対してのアプローチには一定のインパクトが必要になる。そのため、幅広い層の興味関心を高めるような広告塔となる企画の検討が求められる。

さらに、広報の手段についても、来場者の多様化や情報取得および発信手段のデジタル化を踏まえた対応が不可欠である。デジタル媒体を活用した広報活動は、学内外に対する機動的かつ継続的な情報提供を可能とし、事前の期待感の醸成や当日の参加促進に資するものとして位置づけられる。従来の紙媒体での発信と併せて、デジタルとアナログの相乗効果を意識した、バランスの取れた発信戦略を構築していくことが重要である。

4　すべての人が参加しやすく、成長できる学園祭環境の構築

多様化している参加者に対応し、あらゆる参加者が平等に学園祭に参加し、挑戦と成長の機会を得られる環境を構築する必要がある。これを実現させるためには、国籍や言語、宗教や文化、性別、年齢、障がいの有無や能力差などに関係なく参加できる環境を目指す必要があり、それぞれの参加者に対して最適なアプローチが求められる。

また、学園祭は単なる参加の場にとどまらず、それぞれの立場で新たな挑戦や学びに出会い、成長を実感できる場でなければならない。そのため、企画や情宣における対象者を明確にすることや運営者・参画者が一歩踏み込んだ想像力を持つこと、すべての人が参加しやすく、充実した時間を過ごすことができる学園祭を目指すという学友会構成員の共通認識が求められる。

5　環境に配慮した取り組みの促進

近年、環境問題への関心が高まっている。多くの来場者が見込まれる本学の学園祭においても、環境問題に配慮した取り組みを率先して行う必要がある。また、非日常な空間創造を行うことと並行して、既存施設に加え、衛生面や環境面において安心を担保できる設備や仕組みを整えることが重要である。

6　積極的な企業協賛の実施

近年、団体数の増加や活動の多様化、物価高騰により学園祭の財政状況が悪化している。今後も学園祭を継続・拡大していくためには外部収入の獲得が急務である。また、積極的に企業協賛を実施することは学園祭の認知拡大につながると考えられる。加えて、キャン

パス周辺地域の企業から協賛を得ることは、地域とのつながりを増やしていくという観点において望ましいといえる。これらを踏まえ、学生主体の学園祭であるという前提の下、本質的範疇を超えない範囲で企業協賛を積極的に実施する。

7. 祭典戦略

7-1. 祭典戦略作成の意図

各キャンパスで祭典を行うにあたって、それぞれの実態や特性に即した運動を計画する必要がある。そこで祭典ごとにより具体的に情勢を分析し、実態に即して本方針を体現するために祭典戦略を作成する。これによりキャンパス特性や地域との関わりに応じた効果的な学園祭運動を形成することができる。

7-2. 記載事項

◎祭典を取り巻く情勢
◎本方針の意図を汲んだ具体的戦略
その他学園祭実行委員会が必要と判断した事項

8. パートの役割

学園祭運動は全学行事であり、そのために学友会が一体となって推進していくことが極めて重要である。そのためには、各パートの積極的な学園祭運動への参画と協力体制を築く必要がある。また各パートにおいては、各祭典の前日・当日における学園祭実行委員会のサポートを担うことを求める。

以下、学友会構成パートの役割を挙げる。各パートはこれらの役割を認識した上で、役割に基づいて運動形成を行うものとする。

●中央常任委員会

中央常任委員会は、学園祭運動全体において監督責任を負う。また、本方針に立脚する範囲では扱うことのできない議決事項を審議する。

●基幹パート

基幹パートは、各パートにおける利害衝突が発生した場合の調整を行う。また、実務や内包パートの支援にあたる。加えて、所属団体の支援や学園祭への参加を促すことはもちろん、所属団体の今後の発展を見据えたアプローチを行う。

●自治会系パート

自治会系パートは、全学部生に対してアプローチ方法を持つ唯一の団体である。そこで学生実態などを把握するとともに、学園祭運動の認知や雰囲気形成を図っていく。また、各学部における学びを活かした学園祭運動への参画を求める。

●事業系パート

事業系パートは、学園祭に関わる企画実施にあたり、高い専門性を活かし、大規模な広報や雰囲気形成を行う。また、それだけにとどまらず、学園祭の参加者に期待感を抱かせるような広報等を行っていく。さらにその活動を通して、自パートも学園祭の意義を達成できるように取り組む。

9. 実行委員会体制

9-1. 目的

本方針を体現するためには、中央委員会とは異なった、より柔軟な組織体制が必要である。よって、中央委員会での本方針の承認および中央常任委員会の監督を条件として、「学園祭実行委員会」を立ち上げ、本方針の体現を担う組織として位置づける。また、本委員会は、「立命館大学学友会学園祭運動規約」に定められた事項に基づきその運営を担う。

●構成：学園祭実行委員会構成一覧（◎＝議決権保持者　〇＝オブザーバー）

◎学園祭実行委員長：藤澤 海音　（国際関係学部 4 回生）
◎学園祭実行委員会事業統括官：辰野 佑翔　（政策科学部 4 回生）
◎学園祭実行委員会財務統括官：堤 隼斗　（経済学部 4 回生）
◎衣笠祭典委員長：小樋井 朱里　（文学部 4 回生）
◎OIC 祭典委員長：石川 詩野　（総合心理学部 4 回生）
◎BKC 祭典委員長：長谷川 瑞樹　（理工学部 4 回生）
〇学園祭実行委員長補佐：若干名
〇学園祭実行委員会事業統括官補佐：若干名
〇学園祭実行委員会財務統括官補佐：若干名
〇衣笠祭典委員長補佐：若干名
〇OIC 祭典委員長補佐：若干名
〇BKC 祭典委員長補佐：若干名

※各補佐の任命権は、各セクションの議決権保持者が持つものとする。

※学園祭実行委員長が別途必要と判断した場合は、上記の構成員以外のオブザーバー参加を認める。

9-2. 役割

1　学園祭実行委員長の役割
・学園祭運動における最高責任者
・学園祭実行委員会の総理
・学園祭実行委員会決議の議事進行

2　学園祭実行委員会事業統括官（以下、事業統括官）の役割
・学園祭運動における副責任者
・本方針達成のための各企画の監督責任者
・専門的見地による学園祭実行委員会の議論の活発化
・祭典間の実務面での調整

3　学園祭実行委員会財務統括官（以下、財務統括官）の役割
・学園祭運動における財務的判断および処理
・学園祭運動における財政を掌握する会計責任者

4　衣笠祭典委員長の役割
・衣笠祭典における責任者
・本方針を体現する衣笠祭典の戦略の作成

5　OIC 祭典委員長の役割
・OIC 祭典における責任者
・本方針を体現する OIC 祭典の戦略の作成

6　BKC 祭典委員長の役割
・BKC 祭典における責任者
・本方針を体現する BKC 祭典の戦略の作成

7　学園祭実行委員長補佐の役割
・学園祭実行委員長の補佐
・パート支援

8　学園祭実行委員会事業統括官補佐の役割
・事業統括官の補佐

9　学園祭実行委員会財務統括官補佐の役割
・財務統括官の補佐

10　衣笠祭典委員長補佐の役割
・衣笠祭典委員長の補佐

11　OIC 祭典委員長補佐の役割
・OIC 祭典委員長の補佐

12　BKC 祭典委員長補佐の役割
・BKC 祭典委員長の補佐

9-3. 企画の枠組み

本方針の体現に向けて行われる種々の取組みや企画を以下の通り定義する。なお、これらの企画の企画書は、例外なく学園祭実行委員会へ提出されるとともに、その審議の対象となる。

1　学園祭実行委員会企画・特別事業部企画

本方針を体現し、各祭典戦略に則った、有効かつ戦略的な企画の立案を展開できる企画をいう。

2　課外団体企画

学生の自己成長と自己の確認の場としてのコミュニティの存在を強く押し出し、学園祭運動を創り上げていくうえで重要な役割を果たす企画をいう。

9-4. 審議の流れ

以下に各企画における審議の流れおよびその意義と出席者の役割を示す。

1. 議題提出者は学園祭実行委員会へ議題を提出する旨を申請する

2. 事前ヒアリング
実行委員会企画および特別事業部企画においては、事前ヒアリングを事業統括官と財務統括官、該当キャンパスの祭典委員長によって行う。この際、議題提出者は企画構想案と予算案を提出する。
・事業統括官
「本方針を体現した企画形態であるか」という観点からヒアリングを行う。
・財務統括官
企画・計画実施に係る予算を確認する。
・祭典委員長
「各キャンパスの祭典戦略を体現した企画形態であるか」という観点からヒアリングを行う。

3. 特別事業部にて以下のヒアリングを行う。
※本ヒアリングの有無は特別事業部長が判断する。
(a)総務ヒアリング
備品面や施設面の調整を行う。
(b)財務ヒアリング
予算面の調整を行う。

4. 財務統括官・祭典委員長ヒアリング
財務統括官と祭典委員長が審議及び議決を実施する。
・財務統括官
「予算充当が妥当であるか」という観点からヒアリングを行う。また、事前ヒアリングからの変更点を確認する。
・祭典委員長
「各キャンパスの祭典戦略を体現した企画形態であるか」という観点からヒアリングを行う。また、事前ヒアリングからの変更点を確認する。
※必要に応じて、財務統括官補佐、祭典委員長補佐のオブザーバー参加を認める。

5. 特別事業部・祭典委員会での承認
・特別事業部が提出する議題
→特別事業部での審議および議決を実施する。
・その他の部署が提出する議題
→キャンパスごとの祭典委員会で審議および議決を実施する。3 キャンパスにまたがる議題の場合は、すべての祭典委員会で審議および議決を実施する。祭典委員

会は祭典委員の 3 分の 2 以上の出席で成立し、議決においては出席者数の過半数以上の賛成で可決される。

6. 論点ヒアリング
ヒアリングは事業統括官と財務統括官、該当キャンパスの祭典委員長が行う。この際、当該議題の実行委員会での審議日程の調整を行う。
また、論点ヒアリングの議決は出席者の過半数以上の賛成で可決される。
・事業統括官
「本方針を体現した企画形態であるか」という観点から論点整理を行う。
・財務統括官
「予算充当が妥当であるか」という観点から論点整理を行う。また、財務統括官・祭典委員長ヒアリングからの変更点を確認する。
・祭典委員長
財務統括官・祭典委員長ヒアリングからの変更点を確認する。
※論点ヒアリングにおける書類の変更は、誤字脱字等の軽微なものを除き、原則として認めないものとする。
→重大な変更を要する際は、原則として 5 のフローに差し戻すこととする。

7. 学園祭実行委員会において、審議及び議決を行う。
→変更を要する際は、5 または 6 のフローに差し戻すこととする。

9-5. 一事不再議の原則の破棄

一事不再議の原則は、会議が非能率となりうる、また議会として 2 つの意思が存在することになり議会の権威の点から好ましくない、とされていることから設けられる。学園祭実行委員会においては、学園祭運動を形成する上で一切の妥協なく議題を審議するという考えの下、この原則を破棄し、学園祭実行委員長の判断により、再議を可能とする。

9-6. 信頼性の確保

学園祭実行委員会には、本方針に立脚する範囲の議決や予算執行の権限が委譲されており、客観的根拠に基づいた判断が不可欠である。よって、議決権保持者が議題の内容に著しく関与している場合、客観的な判断が不可能であると考えられることから、当該議題の議決にあたって議決権を行使することができないものとする。

9-7. 解散

中央委員会における 2025 年度立命館大学学友会学園祭運動総括の承認をもって解散とする。

10. 財務・財政

限られた財源のなか、継続して 3 キャンパスで学園祭を開催するためには、徹底した予算管理が必要不可欠である。学園祭実行委員会が巨額の予算を扱う自覚と責任を持ち、学友会費三原則に則って運営を担う。

財務・財政面については、例年、個人への負担の集中等、改善の必要な課題が多く残されている。2025 年度は 2024 年度に引き続いて、「予算の徹底管理と機動的な資金運用」を軸とし、過年度の評価点および課題点をふまえた財政運営を行う。

10-1. 学友会費三原則の遵守

学園祭を開催するにあたり、多額の学友会費を使用することとなる。学友会費は、「正当性」「透明性」「還元性」の 3 要件を充たす場合にのみ出金される（学友会費三原則）。この定めは、学園祭においても例外なく遵守されなければならない。これに基づき、過年度と同様に、予算を学園祭実行委員会において承認することはもちろんのこと、それに加えて適切なタイミングでヒアリングを実施していくことで、学友会費三原則に則った適正な予算策定および出金管理を行う。

10-2. 予算・決算の徹底管理

2024 年度に引き続き 2025 年度においても徹底した予算管理を行う。これを体現するため、2025 年度も学園祭実行委員会内に財務統括官に加えてそれを補佐する者を複数名置き、予算・決算管理における負担の軽減を図る。

10-3. 特別事業部財政責任者との連携

学園祭運動に係る特別予算は、その大半を特別事業部が主催する企画に割り当てる。このため、特別事業部内における予算・決算管理も徹底されなければならない。特別事業部内で予算・決算管理を行う財政責任者との連携を密にし、状況把握と適切な財政運営を行う。

11. 総括方法

11-1. 2025 年度の総括の方向性

学園祭運動に関する総括は、本方針および各祭典戦略、各祭典総括、全企画の総括を基に作成し、学園祭実行委員会において議論することが原則となることはいうまでもない。しかしながら、実質的な議論を行う必要性等を考慮する必要があることから、次年度以降の運動形成および発展につながる事項を重点的に、所定の方法により総括を行う。

11-2. 総括実施項目

各企画の詳細な総括については、関係する担当者間において議論するものとする。それをふまえ、2025 年度の学園祭実行委員会において総括を行うのは以下の事項とする。

1. 意義・情勢・方向性にかかわる事項
2. 企画・計画にかかわる事項
3. 学園祭実行委員会体制にかかわる事項
4. 次年度にかかわる重大な事項
5. 財務・財政にかかわる事項
6. その他、学園祭実行委員会が必要と判断した事項

12. おわりに

2025 年度は、立命館大学創立 125 周年の年であり、大学や学友会が今後発展していくための重要な 1 年である。学園共創活動の一環として、大学と学生が共に学園祭を創り上げることは、大学と学友会のつながりを強固にするだけではなく、大学と学生にとっての学園祭の価値を高めることにつながるだろう。これまでの学園祭運動で築いた経験を活かしながら、2025 年度独自の学園祭運動を展開し、さらに昇華した学園祭運動を創り上げることで、学生の「想いをカタチに」していきたい。